

教育学部・教育学研究科

- I 研究水準 研究 1-2
- II 質の向上度 研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、過去 4 年間の平均で教員一名当たりの論文発表数は 1.8 件、国際学会での発表件数は 0.2 件、研究会の主催は 2.8 件である。岐阜県教育委員会と連携して実施してきた 12 年目研修の成果を集約した「教師教育研究」を平成 16 年から刊行している。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択は、過去 4 年間の平均で 28 件(約 4,144 万円)、平均採択率は 27.5%である。文部科学省の他の補助金を 2 件、計 1,766 万円獲得していることは、相応な成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教育学部・教育学研究科において、教育・心理、特別支援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。学術面では、19 世紀アイルランド史の領域で国際的に評価される卓越した業績を上げているほか、自閉症研究や光学顕微鏡システムの開発でも優れた研究成果を上げている。社会、経済、文化面では、卓越した業績は見られなかったものの、ウェブサイ

ト教材「理科教材データベース」の開発や大学と教育委員会の連携協力による教員研修カリキュラムの開発、さらには「全地球凍結」仮説の検討、農業用殺虫剤の開発、映像・音楽作品の制作において業績を上げていることは、優れた成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。